

## 酒造好適米「夢吟香」の栽培指針



50%精白米

### 品種育成の背景・ニーズ

県内の酒米生産地では、日本酒需要低迷を打破するため、生産者と実需者（酒造メーカー）が連携し、地場産米を原料とした吟醸酒、大吟醸酒等、付加価値を付けた酒により新たな需要の喚起を目指した取り組みが動き出しています。そこで、「山田錦」に近い高度精白適性を持ち、栽培安定性の高い品種として「夢吟香」を育成しました。

「夢吟香」は、愛知県農業総合試験場と愛知県食品工業技術センターが共同で開発した吟醸酒用途に適した晩生の品種です。

### 品種の特性

#### ○ 栽培面の特性

- ・「夢吟香」の出穂期、成熟期は、「山田錦」とほぼ同程度です。
- ・稈長は「山田錦」より15cm程度短く、倒伏には「山田錦」より強いです。
- ・葉いもちには「弱」ですが、穂いもちには「やや強」で、縞葉枯病抵抗性を持ちます。
- ・玄米収量は、「若水」とほぼ同等です。
- ・玄米外観品質は「若水」、「山田錦」より優れ、普通期栽培で品質が向上します。
- ・玄米蛋白質含量（以下、蛋白含量）は、早植栽培では「若水」と同等、普通期栽培では「山田錦」と同等です。

## ○ 加工面の特性

- 心白が小さく、線状心白、点状心白の割合が高く、高度精白が可能です。
- 玄米の粒大は「若水」並みに大きく、外観品質が良好です。
- 醸造適性が優れ、吟醸酒の官能評価が高くなっています。

表 1 生育・収量調査結果

作期	品種名	移植期	出穂期	成熟期	稈長	穂長	穂数	玄米収量	収量比率	倒伏
		月日	月日	月日	cm	cm	本/m <sup>2</sup>	kg/10a		
早植	夢吟香	5.20	8.20	9.29	88	21.2	283	448	100	0.5
	若水	5.21	8.09	9.15	77	20.1	316	448	100	0.3
	山田錦	5.21	8.18	9.27	102	20.3	354	474	106	2.2
普通期	夢吟香	6.12	8.30	10.14	83	20.8	308	419	104	0.1
	若水	6.12	8.17	9.26	71	19.6	323	402	100	0.0
	山田錦	6.12	8.29	10.12	99	20.3	374	456	113	2.7

表 2 品質調査結果

作期	品種名	千粒重	玄米品質	蛋白含量
		g		%
早植	夢吟香	26.3	5.3	8.3
	若水	26.0	5.5	8.2
	山田錦	25.9	6.3	7.7
普通期	夢吟香	27.3	4.6	8.0
	若水	26.4	5.1	8.2
	山田錦	27.1	5.8	7.9

表 3 病虫害抵抗性

品種名	葉いもち	穂いもち	縞葉枯病	白葉枯病
夢吟香	弱	やや強	抵抗性	中
若水	弱	弱	罹病性	弱
山田錦	弱	—	罹病性	—

※表1～2 H19～26長久手、ふるい目1.8mm  
 ※倒伏は、0（無）～5（甚）。  
 ※玄米品質は、5.0が一等相当、6.0が二等相当、7.0が三等相当。

## 栽培管理

### ○ 移植時期

6月第1半旬

- 「山田錦」では、出穂11～20日後の平均気温が低い方が外観品質は向上します。
- 「夢吟香」でも同様に、出穂11～20日後の

表 4 出穂 11-20 日の平均気温が収量、品質に与える影響

出穂 11-20日の 平均気温	データ 数	移植期	出穂期	玄米 収量	玄米 品質	蛋白 含量
		月日	月日	kg/10a		%
19-22℃	2	6.9	8.31	388	4.8	8.5
22-25℃	6	6.3	8.23	443	4.8	8.2
25-28℃	7	5.24	8.21	428	5.3	8.1

※H20～27 長久手、ふるい目1.8mm

平均気温が低い方が外観品質は良くなります（表4）。しかし、気温が低すぎる場合には、収量が低下し蛋白含量が増加するおそれがあります。

## ○ 施肥量

地力中庸水田（培養窒素3～4mg/100a、全窒素0.13%）の場合

全量基肥肥料 5.4 kg/10a

分施 6 kg/10a

（成熟期窒素吸収量 11kg/10a 以下がめやすとなります）

- 成熟期窒素吸収量が高いほど、蛋白含量は上がる傾向があります（図1）。特に11kg/10aを超えると、蛋白含量が8%を超えるおそれがあります。
- 成熟期窒素吸収量11kg/10aで、精玄米重は480kg/10a程度となります（図2）。

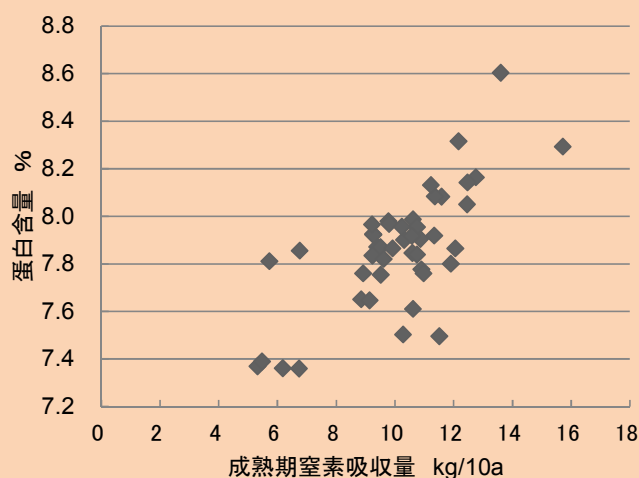


図1 成熟期窒素吸収量と蛋白含量の関係  
(H27 長久手)

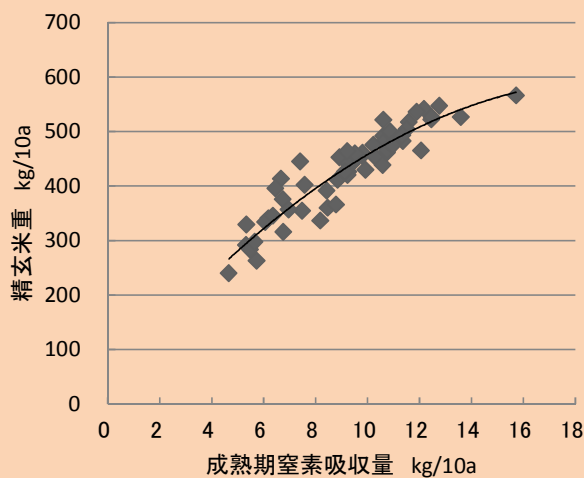


図2 成熟期窒素吸収量と精玄米重の関係  
(H26-27 長久手、ふるい目1.9mm)

## ○ 全量基肥肥料による栽培

「早生用」または「標準」で栽培

- 収量は、「早生用 118」で高くなります。しかし、「早生用 118」「中生用」は、穂肥成分が多く、蛋白含量が上がりやすくなります（表5）。
- 同一条件下で栽培を行った場合、全量基肥肥料による栽培は、分施肥栽培よりも収量が高くなります。蛋白含量は、「早生用」「標準」で分施肥と同等です（表5）。

表5 収量、蛋白含量(肥料別)

施肥法	肥料名 (分施は施肥体系)	施肥量 kg/10a	玄米	蛋白
			収量 kg/10a	含量 %
全量基肥 肥料	早生用118	9	553	8.3
	早生用	9	513	7.9
	標準	9	522	7.8
	中生用	9	521	8.1
分施	5-2.5-2.5 (基肥-穂肥Ⅰ-穂肥Ⅱ)	10	488	7.8

※H27 長久手（培養窒素2.18mg/100g、全窒素0.11%）、ふるい目1.9mm



## ○ 分施栽培

### 1 基肥量、穂肥量について

地力中庸水田（培養窒素3～4mg/100a、全窒素0.13%）  
施肥量6kg/10aの場合

**基肥 — 穂肥Ⅰ — 穂肥Ⅱ 3—1.5—1.5 (kg/10a)**  
(出穂25日前) (出穂15日前)

(総窒素施肥量の概ね半分を基肥、残りを穂肥として施肥してください)

- 基肥の増量は稈長を伸ばすおそれがあります（表6）。
- 基肥の利用効率は低く、増量による収量向上効果は高くありません（表6）

表6 基肥増量による生育、収量への影響

試験区	施肥量		基肥 利用効率	稈長	玄米収量
	基肥	穂肥(Ⅰ+Ⅱ)			
	kg/10a	kg/10a	%	cm	kg/10a
基肥増量	5.0	3.0	27	87	464
対照	2.5	3.0		86	458

※H27 安城(地力中庸水田)、ふるい目1.9mm

### 2 穂肥の施用時期について

**穂肥1回目は出穂20日前までに施用**  
(穂肥2回目は、1回目の約10日後)

- 穂肥を遅く施用すると、蛋白含量があがりやすくなります（表7）。

表7 穂肥時期と蛋白含量

穂肥Ⅰ (出穂前日数)	蛋白含量
日	%
-29	7.64
-20	7.60
-13	8.25

※H26 長久手

穂肥Ⅱは、穂肥Ⅰの10日後に施用

## ○ 栽植密度

**60～70 株/坪**

- 坪50～70株の範囲では、外観品質・玄米収量・蛋白含量に差は見られません（表8）。
- 適期より移植が遅れる、地力が著しく低い場合は、疎植栽培において生育不足となるおそれがあります。

表8 栽植密度と収量、品質

栽植 密度	玄米 品質	玄米 収量	蛋白 含量
株/坪		kg/10a	%
70	4.6	407	8.0
60	4.3	412	7.8
50	4.3	431	7.8

※H26-27年 安城、ふるい目1.9mm

編集・発行

愛知県農業総合試験場

〒480-1193 愛知県長久手市岩作三ヶ峯1-1

TEL 0561-62-0085 内線390 (企画普及部)

FAX 0561-63-0815

<http://www.pref.aichi.jp/nososi>

問い合わせ先 作物研究部作物研究室 内線502

この栽培指針は、平成27年度あいちが作った優良品種活用推進事業で作成しました。